この国はどこへ行こうとしているのか(6)

毎日新聞 7 月 14 日夕刊特集ワイドから。「今の安倍晋三政権は、現行憲法を憎んでいるのではないですかね----」 憲法を、憎む―。強い感情を示す言葉が、現代文学を代表する作家の一人、島田雅彦さん(54)の口からこぼれ落ちた時には、さすがに驚いた。「安倍首相は最初、改憲のハードルを下げるために 96 条に手を付けようとした。だが、現行憲法の規定に従わなければならないので、今度は解釈変更で乗り切ろうとした。それが今回の『戦争法案』です。つまり安倍政権のやりたいことをことごとく邪魔するのが現行憲法、という構図です。しかし 1 票の格差が是正されない状態で成立した政権も違憲だが、この法案も違憲。政権の意向に憲法を従わせようなんて本末転倒です」

憲法を憎んでいる

作家 島田 雅彦さん

実際、憲法学者らが安全保障関連法案に「違憲」判断を突きつけたことが世論を動かし、安倍政権は今、支持率を落としつつある。「現行憲法のことを米国からの『押しつけ』だから改正しようと言う。しかし同じ『押しつけ』であっても日米安保条約はかたくなに守ろうとする。大変な矛盾ではないか。安倍政権は、憲法より日米安保条約を上位に置こうとしているのです」「国会の場では数の力に任せて強行採決もできるでしょうが、支持率低下と引き換えになる。 ゴリ押しすることで逆に改憲の野望は遠のくのではないでしょうか」そう考えるのは、安保法案に反対する学生グループ「自由と民主主義のための学生緊急行動(SEALDs=シールズ)」が国会前で抗議行動を行うなどの動きに大きな希望を感じているからだ。「非常に当事者意識の高い運動が育ちつつある。この少子高齢化時代において、若者には社会に大事にされていないという不満が根強いはず。そこに今回の安保法案では徴兵制復活までが語られ始めた。『俺たちは戦争にまで駆り出されるのかよ？』と我が身に降りかかる危機を感じているのではないでしょうか。実際、本当に戦争になれば、政権を批判する学生の就職の内定を取り消せとか、島田の本なんて発禁にしろと言い出すやつが今よりもっと威張り出す」

では今、できることは何なのか。島田さんの言葉が強く、真っすぐだった。「一人一人が反対の意を唱え続けること。政治を動かすのは国会だけではないのですから」。デモで、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)で、メディアでの発言で―。「異議を唱え続ければ、政権の支持率低下につながります。ネトウヨの罵詈雑言よりも政権批判の正論の方が強いし、説得力があるのです」

(2015 年 7 月 17 日)